幼児の音楽についての一考察
―領域「表現」を鑑みて―

島　長　　恵　美
四條畷学園短期大学

A Study Of Early Childhood Music
- In View Of The Field“Expression” -

Emi Shimanaga
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要　第 50 号　別刷
平成 29 年 12 月 25 日

研究報告

幼児の音楽についての一考察
―領域「表現」を鑑みて―

島 長 恵 美*

A Study Of Early Childhood Music
- In View Of The Field“Expression” -

Emi Shimanaga

Key words: 幼児の音楽と‘表現’ 保育の場における音楽 保育者のピアノ演奏の向上 幼児の音楽指導

はじめに

子どもは、誕生からの数年間、その時期にふさわしい学び方でその時期に必要なものを学び取って生きている。人が音楽を学ぶ始まりは乳幼児期であるといえよう。幼稚園・保育園での歌唱指導ばかりでなく、床の上で足を踏み鳴らしたり、棒でテーブルを叩くなどの遊びの中での行為も、小さな音楽の一つと言えるものであろう。子どもは遊びながら様々なことを学ぶ。

また、音は、ある時は言葉と結びつき、あるいは体の動きと結びついて更なる表現力を発揮する。お絵描きをしながら歌を口ずさんでいる子どもは画家や音楽家であるかもしれないし、音楽に合わせて体で表現している時にはダンサーなのかもしれない。そのような自己表現をする子どもたちと同じ視線に立つべく保育者もまた、ある意味これらすべての役割を担う必要があると思われる。

幼稚園や保育園における音楽の教育は、専門家になるための‘特別な教育’としてではなく、音楽によって何かを感じ、心を動かされ、子どもの中に潜んでいるものを言葉や歌や身体で表現できるようになり、また表現する喜びを味わうといった、人間の成長を育むものの一つとして捉えることが大切であり、それを一部担うのが保育者である。

幼児の音楽教育と‘表現’

幼児期の経験はその後の発達に非常に重要な役割をもつ。子どもにとって‘音楽’とは何か、音楽における‘表現’とは何か。音楽は、自らの思いを伝えることのできる手段の一つであり、また、仲間と共有することでコミュニケーションが生まれる。また、保育において‘表現’とは、園生活や遊びの中で心を動かされたことを様々な方法で表すことで、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。幼稚園指導要領が示す領域「表現」では、子どもの美的経験や美的表現への要求に対し、保育者が様々な音楽を通して、いかに関わり、いかに援助できるかが求められている。保育における‘音楽’は、単なる技術の向上だけではなく、音楽に親しみ、音楽に触れる楽しさや喜びを味わうことが大切であり、音楽を通じて、幼児の人間としての全面的な発達の基礎を守り育て、‘表現’を介して人間を育てることである。

保育者に求められる音楽指導

保育における音楽には、生活の中で音楽を使って子どもたちの気持ちを切り替えたり、様々な生活習慣を理解しやすくさせるための曲（おはよう・おかたづけ・手洗い・おべんとう・歯みがき・お昼寝・服をたたむ・静かにする・並ぶ・おかえり…など）や行事の歌、四季を感じる歌、マーチやランニング・スキップ・ギャロップなどの動きのための曲や手遊びなどが考えられるが、それらを保育者や友だちと共有することでコミュニケーションが生まれ、

＊ 四條畷学園短期大学 非常勤講師

‘仲間と一緒が楽しい’という気持ちや、声を合わせて歌う喜びを味わう。

楽器の使い方も、通常の‘正しい奏法’に限らず、頭に載せてみたり体と密着させて使ったりすることで子どもの心を動かしたり想像力を高め、また、それを他者と共有することによって、新たな発見や感動が生まれることもあろう。

保育の場での音楽教育には、子どもの人間的成長を導くものが求められる。子どもは、保育者のピアノや歌を聴いて耳から覚え、様々な音楽を経験していく。よって、乳幼児が教育の中で初めて経験する音楽を担う者としての保育者は、でき得る限り楽譜を正確に読み取り、音楽を奏でる喜びや楽しさを感じて正しく音で再現することが大切である。それは、ピアノ曲をすらすらと弾く技術だけではなく、子どもへの音楽指導の中で、子どもの創造力を引き出し、伸ばすことのできる、広い意味での音楽性にも関わってくる。音楽によって感性を刺激し、何かを表現したくなった子どもを適切に助けることが保育者の務めであろう。提示される音楽にまるで興味を示さず、‘知らんぷり’をしていたような幼児が、ある時を境に急に興味を示し始め、「あぁ、ずっと聴いていたんだな･･･」と思えるようなことも多々経験する。これらのことからも、豊かな感性と表現力を持った保育者の養成が重要であると思われる。

音楽用語でのピアノは‘弱く’を意味するが、ただ“小さい音で演奏する”というだけではなく、柔らかさ・悲しみ・不安・小さな喜び・秘密など、様々な音色の表現が考えられる。それらのことは、童謡の場合は歌詞から読み取ることができ、また、その場面での語り手は誰であるのか、どんな気持ちからの言葉か、言葉からくる各フレーズの表現、また歌詞の途中で語り手が変わっている場合は音色を変えて表現することなども重要である。童謡の歌詞を、登場人物や場面、誰の言葉か、またその人の気持ちなどを考えて表情豊かに子どもに聞かせ、それを歌にも反映させて表現する工夫が望ましく、単なるピアノ演奏の技術だけではなく、そういう‘表現’についても考えられる保育者を育てたい。それによって子どもの心が動き、感性を高め、保育者も子どもと共に楽しみ、あるいは子どもの自発的行動を見守りながら、子どもの中から感動を呼び起こして表現したいものを引き出すことができるよう望まれる。

我々が日常接している日本の教育における音楽は、明治初期より欧米の音楽を参考にして取り入れられたものであり、キリスト教を中心とした社会の中で育ってきたそれらは、日本古来のものとは全く異なる新しい文化であった。その流れをくむ童謡を演奏する場合、楽譜を読んでいくことが原則として不可欠であるが、特にピアノ初心者の学生の場合、楽譜における縦軸（音の高さ）と横軸（リズム）を把握しながら、強弱や相応しい音色などの曲の表情を表現しつつ、テンポを守って弾き歌いをするということには大変な苦労が伴い、大変な努力が必要になる。本学東保編による童謡楽譜（３冊）では、原曲のもつ美しいニュアンスを損なうことのない範囲で左手の伴奏を易しくして、保育者の負担を少しでも軽くするよう編曲されている。本学では、この内の多くの曲を童謡の教材として用いているが、特にピアノ初心者の学生に対しては、バイエル等の教則本と並行して、５指のみで演奏可能な童謡や、両手共に６音程度からなる短い子どもの歌を弾き歌いの導入として用いている。また、左手伴奏でよく使われる基本的な和音を‘手の形で’理解して（形ごとに独自の記号を用いている）反復練習することで和音を掴み易くし、ハ長調以外の調でも必要な臨時記号に気をつけることだけで応用できるよう工夫をしている。さらには、音楽の専門家になるのであれば五線上の音名を瞬時に読めることは当然のことであるが、短期間で保育者として現場で通用する力を付けるために、右手のメロディーや左手の単音伴奏の音に対しての相応しい運指を楽譜に記入することによって音を読みやすくしたり音の間違いをできるだけ減らし、加えて、広い音域に渡る音型で必要な‘指をくぐらせる’使い方に慣れるために音階の指使いを徹底させて、子どもたちに少しでも余裕をもってスムーズに音楽が提示できるよう指導している。

作曲家が指定した‘拍子’は、その曲を理解する上で非常に大切なものである。‘拍子’のもつニュアンスを理解することがその曲のニュアンスを理解する上でとても役立つ。また、種々のリズムは‘１拍’の概念の上に成り立っている（２拍伸ばすためには１拍の長さを理解することが不可欠なように）。これらのことから、本学学生には、曲を練習

する際には必ず足で拍子をとり、拍子感を身につけるよう指導している。

上記のことを一冊にまとめた本学独自の冊子を音楽研究室で作成し、本学高等学校保育コースの生徒や本学保育学科の学生に配布して、ピアノの勉強の助けになるよう、徹底を図っている。また、一人ずつに対して学習した曲目が分かるような一覧表を作成し、指導教官が変わっても学習が円滑に進むようにしている。

発声には、その国の言葉、生活環境、風土、国民の骨格など、あらゆることが関わっている。イタリアではベルカント、日本の伝統音楽では主として地声（地＝‘持ち前の’声）など、各国の民謡にはその生活から生み出された声が用いられる。子どもたちには、‘自然で無理のない声で’歌うように指導するのが良いのではないだろうか。保育者自身が美しく柔らかい声で範唱するのが良いが、規制し過ぎて子どもたちの生き生きとした喜びや歌う楽しさを奪ってしまわないように配慮することも重要である。上手く歌えない子どもも耳や心で歌に参加していることもあり、少し難しいかなと思った曲でも提示の仕方やタイミングで思いがけず子どもの心に入って行ったりと、子どもとの距離は常に微妙であり、その不定感がまた面白い。

歌うことは、全ての音楽表現の中で最も自然な形と考えられる。新しい歌の導入の際には、まず、子どもがその曲に親しみを覚えることができるよう歌詞をお話のように聞かせて、子どもとの対話を楽しむことが大切である。‘音’という見えないものへの感性を高め、楽譜を注意深く読み、正しい音程で歌詞の内容を表情豊かに子どもたちに伝えることが、重要であろう。

幼児が興味をもつ童謡としては、歌詞にストーリー性があり日常体験からも理解しやすい曲や、言いやすく楽しい言葉が入っていたり（ガチャガチャ、コンコンクシャンなど）、動物との会話、おもちゃが動く、空を飛べたらいいのにといった、夢のある歌詞の曲などが挙げられる。童謡の歌詞をペープサートなどの視覚に訴えるものにして、音楽と共に子どもたちに提示することも、子どもたちの心を引き付ける。

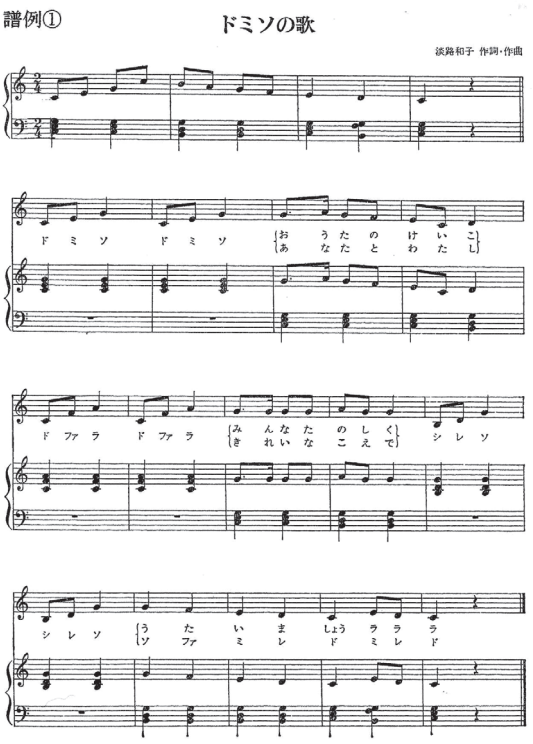
また、指導中も極力子どもたちの顔色や様子を掌握できるよう、可能な限り子どもを見ながらピアノを弾けることが望ましいと思われる。学生が二人一組になって先生と子ども役になり、途中で止まったりすることなく弾いたり歌ったりすることも、学生には楽しく、また刺激になるようだ。

この他、前奏から歌に入ったらピアノの音量に気をつけるなど、歌とピアノとのバランスを心掛ける。弾き歌いについては、人前で歌うことへの羞恥心を取り除き、歌詞を明瞭にして表情豊かに、良いテンポで子どもに提示できるよう、また、子どもが上手く歌い出せるような声掛けも大切で、初心者の学生にとっては色々難しいものではあるが、保育者になるための目標を常に持って日々努力することを今後とも指導していきたい。

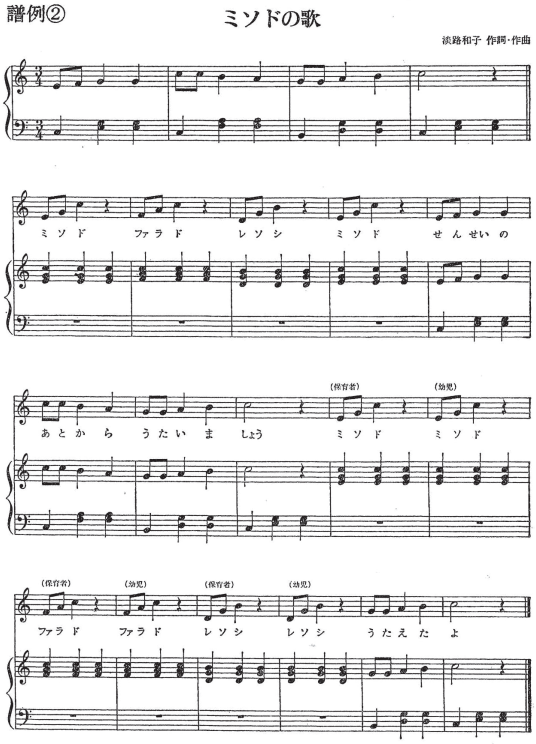
幼児の音感教育などについて

最後に、筆者の本学大学附属幼稚園や本学子どものための音楽教室での歌唱指導やソルフェージュ、リトミック指導の経験から、幼児の音楽指導における音感教育などについて以下に述べたい。

柴田南雄氏が唱えるように、子どもの音感が最も身につくのは４歳から６歳の間くらいであるという。主要三和音をはじめとする和音を弾いて分散唱し子どもが模倣したり、音名で答える。将来的なことを考えるとドイツ音名がより相応しい。その導入としての≪ドミソの歌≫や≪ミソドの歌≫（ドイツ音名では≪ツェーエーゲーの歌≫・≪エーゲーツェーの歌≫）譜例①②も大変有効である。

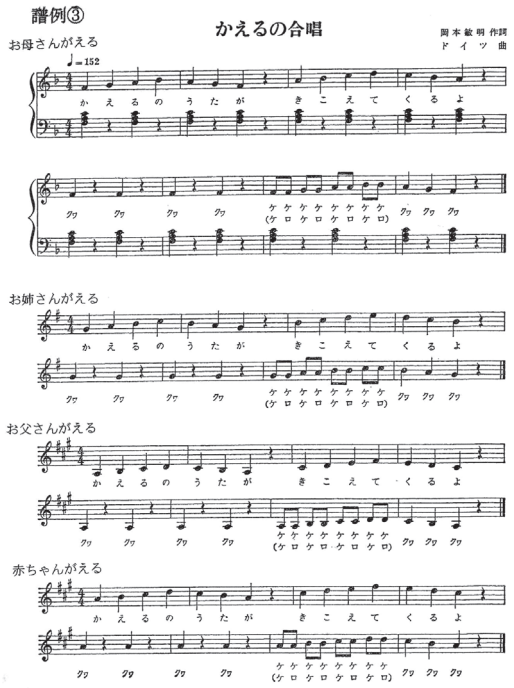


譜例②



同じく音感を育てるために短い旋律を音名唱したり、無理のない発声による声のイメージを作るために“こんにちは”や“ヤッホッホー”などの短い言葉を色々な音高で歌い、子どもが模倣するのも良い。また、譜例③のように、≪かえるの合唱≫などの曲を使って‘お姉さんがえる’などの声のイメージをもって移調唱することで、無理なく子どもの声域を広げることができ、音感も身に付く。

譜例③

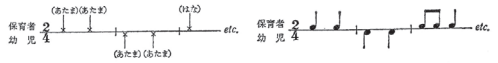


輪唱の導入として用いると良い譜例④は、子どもたちの大好きなものの一つである。

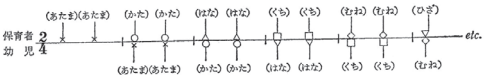
譜例④

〔カノン（輪唱）への導入〕

1） 模倣……ことば，リズムなどの模倣。

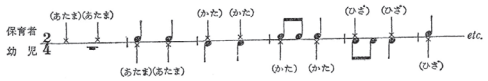


2） 模倣の連続……下記のように連続した模倣に発展させる。



単なることばのみの模倣では理解しにくいので，身体的な動きを加えると，一層効果がある。

3） 2)をさらに発展させ，リズム打ちを加える。



2拍子ができるようになれば，3拍子，4拍子と拍子を変えるのもよい。但し，一定の速度で行うこと。

身体の動きを伴う音楽表現としてのリトミックも、幼児の音楽的成長を大いに助ける。

おわりに

音楽をはじめ、芸術教育の核心は‘芸術を通してときめく心を呼び起こすこと’にあり、音を介して人間の五感や身体に働きかけ、想像力を広げていくことが、乳幼児期の‘表現’を育てていくのではないだろうか。

子どもたちの生きる力の基礎を培うものとなるよう、今後も子どもの‘育ち’に目を向けて幼児の音楽に関わっていきたい。

参考文献・引用文献

(1) 日本音楽教育学会編『音楽教育学の未来』日本音楽教育学会設立４０周年記念論文集：音楽の友社 2009

(2) F.W アロノフ著　畑玲子訳『幼児と音楽』：音楽の友社　1990

(3) 高橋好子ほか４名著『幼児と音楽教育』：文化書房博文社　1986

(4) 引用・譜例①②③④　岸井勇雄 大久保稔編『音楽（音楽リズム）』：チャイルド本社　1984　P108-109、124-125、134-135

－ 2017. 10. 25 受稿、2017. 10. 31 受理－